

## 内房海上反射法探査によって新たに得られた房総半島南部最近約100万年間地殻変動上の基礎データ

Recent 1 m.y. crustal movements off the Tokyo Bay-side coast of the southern part of the Boso Peninsula.

# 古屋 裕 [1]; 橋間 昭徳 [2]; 津村 紀子 [3]; 佐藤 利典 [4]; 宮内 崇裕 [5]; 亀尾 浩司 [6]; 伊藤 慎 [7]; 伊藤 谷生 [8]; 平田 直 [9]; 佐藤 比呂志 [9]; 荒井 良祐 [10]; 山本 修治 [11]; 阿部 信太郎 [12]

# Hiroshi Furuya[1]; Akinori Hashima[2]; Noriko Tsumura[3]; Toshinori Sato[4]; Takahiro Miyauchi[5]; Koji Kameo[6]; Makoto Ito[7]; Tanio Ito[8]; Naoshi Hirata[9]; Hiroshi Sato[9]; Ryoyu Arai[10]; Shuji Yamamoto[11]; Shintaro Abe[12]

[1] 千葉大・理・地球; [2] 千葉大・理・地球; [3] 千葉大・理学; [4] 千葉大・理; [5] 千葉大・理学研究科・地球科学コース; [6] 千葉大・海洋バイオ; [7] 千葉大・理・地球; [8] 千葉大・理・地球科学; [9] 東大・地震研; [10] 川崎地質(株); [11] 国際石油開発帝石; [12] 地震予知振興会

[1] Grad. Sci., Chiba Univ.; [2] Earth Sci, Chiba Univ.; [3] Grad. School of Sci., Chiba Univ.; [4] Chiba Univ.; [5] Earth Sci., Chiba Univ.; [6] MBRC, Chiba Univ.; [7] Earth Sciences, Chiba Univ.; [8] Dept. Earth Sciences, Fac. Sci., Chiba Univ.; [9] ERI, Univ. Tokyo; [10] KGE; [11] INPEX Inc.; [12] ADEP

房総半島南部は、首都圏を襲う巨大地震に伴う地殻変動が累積している地域であり、防災・減災研究には最適な地域の1つである。従来、地殻変動を解明する上では測地学的、変動地形学的手法が主流であったため、地殻変動のうちの粘性的挙動を定量化することが難しかった。そこで房総半島南部において付加体を覆う約100万年前以降の海溝斜面堆積物にターゲットをあて、その構造と変形を把握することによって長期間地殻変動上の基礎データを獲得しようとする研究が現在進められている。付加体構成層を不整合におおう斜面堆積物は房総半島南部の陸域から浅海域にかけて広く覆っていることが期待されているので、2008年9月、内房沿岸の浅海域におけるマルチチャンネル反射法地震探査を以下のように実行した。

本探査は、千葉県富津市金谷沖～館山市洲崎沖約3kmを結ぶ南北方向約20km及び東西方向の館山湾に向かう約6kmの2測線で、エアガンを12.5m間隔で発震し、24ch・300mのストリーマーケーブルで受振した。

現在までの処理作業で得られた反射法プロファイルからは、館山湾ならびに富浦-岩井沖には斜面堆積物が広がっていること、それらの堆積物中には断層並びに波曲構造が認められること、特に館山千倉低地帯北縁には明瞭な逆断層が存在すること、などの基礎データが取得される。現段階では掘削データがないので厳密な層序をプロファイル上で決めることはできないが、大大特「房総2002」(文科省他, 2003)等による地震波速度構造から、斜面堆積物中の豊房層群(基底は約100万年前 小竹, 1995)相当層、豊房層群上部東長田層(基底は約70万年前)相当層を暫定的に推定できる。内房ならびに館山湾のデータが得られたことにより、千葉大学が独自で行った太平洋側浅海域反射法のデータ(山本, 2007)と結合して、房総半島南部の陸域と浅海域における過去約100万年間の地殻変動を面的に把握できる展望が生まれたといえよう。これを受けて本講演においては、房総半島南部ならびにその周辺における最近約100万年間の地殻変動像を暫定的に提示する。